

「牧さん、ちよつと訊きたいことがあるんです」

三時間目のあとの休み時間に、背後から声がした。振り返らなくてもわかった。教師のなかにはその声で呼びかけられて鼻の下を伸ばす男もいた。しかし私は冷たい手で首根っこを掴まれたような気がした。

「何か？」

私は椅子ごと宮本華子のほうに向いた。彼女は両手を腰に置き、ワインレッドのブラウスの下の胸の二つの隆起を誇るかのような姿勢で私を見下ろしていた。無論、彼女は私にそのバストを見せつけて気を惹こうとしているわけではない。

宮本華子が私を「牧先生」でなく「牧さん」と呼ぶときには危険信号だ。今朝の職員会議をサボったことにたいする叱責であろうか。

「最近、この辺りの治安も悪化していることはご存じね」

「ああ、そうなんですか」

何を言い出すのか、いぶかしさを隠すのは難しかった。

「『そうなんですか』じゃないでしょう。あなたも教師なんだから、生徒の安全というものを考えてもらわなくては困ります。隣の中学の女子生徒が痴漢にあったり、小学生の女の子が得体の知れない男に話しかけられたりという事件が続いているんですよ」

「はい、それは聞いています。で、僕に訊きたいというのは——」

「昨日辺りから、怪しげな男が公園をうろついているでしょう」

「怪しげ……?」

「そう。しかも牧さん、あなた、その男と親しそうに喋っていたっていうじゃありませんか、今朝」

なんてこつた、と思った。誰かが告げ口したのだ。いや、告げ口というのは当たらないかもしれない。私が城戸と話しているところを、公園を通学路にしている生徒なら誰でも見ることができた。それを何気なく宮本に話す機会もあったろう。

「わたしたち教師は、生徒を指導、監督して、保護する立場にあるんですよ。あなたの行動は軽率だわ」

「軽率、ですか？」

「だってそうでしょう。相手は素性も知れない、薄汚い……ホームレスなんですよ。」

何をしでかすか、わからないような……」

「違います」

私はぴしゃりと叩きつけるような言葉を吐き出していた。

宮本華子は細い眼をいっぱいに見開いて、呆気にとられたように私を見下ろしていた。それも無理はなかった。私が今までに彼女に対して——いや、ほかのどの教師に対しても——こんな口調で言い返したことなど一度もなかった。

しかし、彼女は立ち直るのが早かった。

「確かにああいう人たちが気の毒だとは、わたしも思うわ。同情もするし、手をさしのべたい、手助けしてあげたい、と思います。けれど、それは行政の仕事で、教師には、その前にやるべきことがあるでしょう？　まず、生徒の安全を確保しなければなりません」

「あの男はべつに危険でも何でもありません」

「そう思いたい牧さんの気持ちはよくわかります。けれどね、気持ちと現実のあいだには大きな乖離があるのが世の中の常なの。それにね、仮に牧さんの言うとおりに無害な男だったとしても……教師たる者、ああいう手合いの人と、しかも生徒の眼のあるところで無邪気にお喋りするなんていうことは、どうかと思います。わたしならやらないわ」

「教師とホームレスは、会話なんかすべきじゃないとおっしゃるんですか？」

私の言葉に、宮本は少しのあいだ沈黙した。次に口を開いたとき、その声の温度は確実に数度下がっていた。

「牧さんの考えはよくわかりました。これ以上話しても有益な議論はできないよね。ま、いずれにせよもう終わったことですが」

「終わった？　どういうことですか？」

宮本華子は口の端だけに笑みを見せた。

「朝のうちに警察に電話をしておきました。いえ、これはわたしの独断でなく、ほかの先生方とも話し合って決めたことよ」

「何も、そこまでしなくても……」

宮本の笑みは、口の端から頬へと拡がっていた。

「牧さん、もう一度あなたの職というものを考えてみるべきだわ。次の授業のとき、

生徒たちの顔をよく見回してごらんさい。あなたを『先生』だと信頼している四十数人の子どもたちの顔をね。そうして、考え直してみるの。牧さんが個人的なちよつとした憐憫の心を發揮して満足することと、四十数人の子どもたちが平和で安全に学校生活を送ることの、どちらが重いのか。牧さんなら、きつとすぐにわかると思います」

宮本は満足げにひと息つくくと、私から離れていった。

頭のなかと両肩に重石を埋め込まれたような気分になった。自分の机に向き直り、椅子に座り込んだ。

と同時に、乾いた音でチャイムが鳴った。

高校二年のときだった。城戸真澄は、同じ弓道部の女の子に「つきあってくれ」と申し込んだ。その相手というのは、部員の誰もが認める評判の美少女だった。白い道着と黒い袴が見事に似合い、そんな彼女が弓を引く姿に男子生徒は見とれたものだった。弓道部員でもないのに、弓道場まで彼女をわざわざ見に来る男までいた。

そんな彼女に、城戸はイラストを送った。城戸が彼女のためにどんな絵を描いたのかはわからない。しかし、彼女は絵を受け取り、二人は交際を始めた。弓道部のほかの男たち——私を含めて——がどれだけ歯がみをしたことか。

ところが、二人は長続きしなかった。たった数ヶ月で分かれることになった。しばらくたったあと、城戸は私に言った。「結局ふつうの女の子だったのに、見抜けなかったとは我ながら情けねえや」と。そのとき私は、城戸の言いぐさに憤慨したものだった。

城戸真澄はそんな男だった。

六時間目は授業がなかったので、私は五時間目が終わると同時に学校を出た。本来なら早退届を提出しなければならないのだが、私は出さずに早々に職員室を抜け出した。木全も宮本も六時間目の授業に出っていたので、嫌味も冷やかしも注意も受けずに済んだ。

公園までの足どりは、いつしか早くなっていた。

空は、まるで私の気分を吸い込んだかのようにどんよりと曇り始めていた。空気

は湿っている。風は生ぬるい。

私は足早に公園に入ると、ほとんど駆け足でジャングルジムの前を通り過ぎた。恐れていたとおりだった。

男の姿はなかった。紫色の土管のなかを覗いた。シヨッピング・バッグさえも消えていた。男のいた痕跡はまったくなかった。念のため、黄色い土管のなかを覗いた。からだだった。次に、赤い土管。同じく人のいた跡はなかった。

もう一度紫色の土管のなかを覗き込んだ。土管の下に、煙草の吸殻——ラッキー・ストライク。

やはり奴は、私の煙草を吸ってくれたのだ。それが小さな慰めになるような気がした。

ラッキー・ストライクの吸殻を片手で包み込むように持ったまま、私は公園の奥に向かった。

公園の奥にはテニスコートが四面と、小さなユリ園があるだけだ。男が雨露をしのげるような場所はない。彼のような者は、ますます自立ってしまうだけだ。

広い公園をぐるりと小走りに見て回ったが、男の姿はなかった。もう一度土管のところに戻ったときには全身、べったりと汗をかいて、息切れもしていた。

未練がましく、土管の周囲を見回した。

やはり、彼は消えてしまった。警官に追い立てられたのか。どんな態度で扱われたのだろう。彼は今夜をどこで過ごすのだろうか。

もう一度、ラッキー・ストライクの吸殻を取り出して見た。

今朝のあのやりとりが、彼との最後の会話になってしまふのだろうか。後悔の念が胸を締め付けてきた。

私の彼に対する態度は間違っていた。城戸とは、もつと語りたいたことがあった。語らなければいけないことがあった。しかし私がこの公園で口にしたことはいったい何だったろう。

城戸、おまえはまた何も言わずに消えてしまふのか。私はおろか両親にも何も告げずに大学を中退し、いずこともなく姿を消したおまえが、十数年後にまた同じ去り方をするのか。今度もまた私に何も言わず、何も言わずに消え去っていくのか。空を見上げた。雲は厚い。湿った空気の匂いがした。今夜は雨になるかもしれない

い。もう大気の肌触りに夏の名残はなかった。秋なのだ。冷たい雨になるだろう。視線を戻すとき、向かいのマンションが眼に入った。

——赤いカルマン・ギア。
公園を出た。

確信などなかった。

地下駐車場かと思えたが、実際は半地下で、マンションの地階部分そのまま駐車場になっているのだった。全部で二十台ほど停められるスペースがあつたが、今は四、五台しか車は入っていないかつた。赤いカルマン・ギアは、ない。

エレベーターに乗り込んだ。「5」のボタンを押すのがためらわれた。が、ここらにきて何もしないで帰るわけにいかない。思い切つて押した。

音もなく、あつと言う間に五階に着いた。

廊下には誰もいなかった。音も聞こえない。匂いもなかった。並んだドアの向こうに人の生活があるようには思えなかつた。無機的で、どこか人間性の感じられない冷たい空間。私の住むワンルームマンションとは雰囲気がいふんと違つていた。5もつとも、築二十四年の私のマンションとは違い、こちらは建てられて一年もたつていないのだ。生活感がないのは、そのせいもあるのかもしれない。

右から四番目のドア。

深呼吸をした。廊下に足を踏み出す。いったい自分は何を期待しているのだろう、と思つた。

その答えも出ぬままに、あつけなく部屋の前に着いてしまった。

505号室——表札は出ていなかった。この部屋に限らず、表札を出しているところは少なかつた。右隣の503号室は——4号室はなかつた——表札なし。反対隣の506号室には「大山」とある。

耳をすませた。何も聞こえない。廊下に人がいないことを確認し、505号室のドアに耳を当ててみた。やはり、何も聞こえない。留守なのだろうか。

インタフォンのボタンに手を伸ばしかけて、また引つ込めた。

いったいぜんたい、私は何をしようとしているのだ？

後先の考えなしにここまで先走つて行動してしまうなど、私らしくもないことだ

った。十何年ぶりの親友の再会と別れが、私の気持ちをいつになく焦らせ、大胆にしているようだった。

おいおいどうした、牧先生。おまえらしくない。私は、自分のこれまでの行動に苦笑した。

エレベーターに戻ろうとしたとき、風に乗って遠くからチャイムが聞こえた。新陵高校のチャイムだ。私は、ほとんど無意識的に腕時計を見た。ちょうど六時間目が終わったところだった。職員室に戻ってきた木全は、私がつきと帰ってしまったことを知ってどう思うだろう。

腕時計——ミリタリー・ウォッチ。

まさか、と思った。

独特のエンジン音。赤いカルマン・ギアに乗って男がマンションに帰宅する。腕時計を見る——高価で頑丈そうなミリタリー・ウォッチを。なぜ時計など見なければならぬ？

答えは一つだけだった——男の帰宅時間を知るため。

急に、緊張感が足元から這い上がってきた。

住人は城戸のことを知らない。

が、城戸は住人を知っている。

ただ知っているだけではない。城戸は、見張っていたのだ。

ならば、私がここにいるのはまずいのではないか。

その通りだった。それはまずかった。たいへんまずかった。

足音に振り返った。

廊下の向こうに立っているのは、黒っぽいスーツを着た長身の男だった。私と男は一瞬にらみ合った。いや、正確にはにらみ合ったかどうかはわからない。男はサングラスをかけていたから。

私の体は凍りついていた。頭のなかも、一瞬空白になった。とつさにどうすべきか判断ができなかった。

男は足早にこちらに近づいてきた。まっすぐ顔を私に向けたまま。男は、私が505号室の前にはばらく立っていたことに気づいているはずだ。

焦るだけで思考は空回りした。

逃げ道を求めて、廊下の反対側を見た。そちらを振り返るという行為そのものが私の立場を悪くするだろうことに、そのときは思い至らなかった。

反対側は、無情にも行き止まりで何もなかった。正確には、507号室の住人のものらしいマウンテンバイクが壁の前に置かれていたが。

男が近づいていた。心なしか、男の歩調が早くなっているようだった。否応なく口中が乾いていった。唾を飲み下す。男の両の拳は握られていた。力が込められているらしく、その拳は小刻みに震えていた。男の姿がみるみる大きくなっていく。

私は、最悪の方法を採った——走り出したのだ。

靴を楯のように体の前に持ち、全力で狭い廊下を駆け出した。私が体当たりすると思ったのか、男の動きが一瞬だけ鈍った。その隙に私は男の脇を駆け抜けた。廊下の手すりに体がぶつかりそうになる。しかし走る速度は変えずに、私は一気にエレベーターホールに入った。

振り返る余裕はなかった。男の足音。背後に迫っている。エレベーターは、幸いにも男が乗ってきたあと五階に止まったままだった。下向きの矢印のボタンを押す。7ドアが開くと同時に飛び込んだ。一瞬、自らを袋のネズミにしてしまったのではなにか、という思いがよぎった。が、それ以上思考する余裕はなかった。

「閉」のボタンと「1」のボタンを同時に押した。ドアが閉じる。いきなりまたドアが開かないことを祈った。

開かなかった。エレベーターは下降を始めた。それと同時に、安堵の息がもれた。が、まだ安心はできない。このエレベーターの速度はどのくらいだろう。男が非常階段を駆け下りるのと、どちらが早いのか。

上ってきたときとは違って、一階まで下りるのには何十倍もの時間がかかったような気がした。じりじりと焦りを噛みしめながら、階数の表示を凝視した。そうしたところで、エレベーターの速度が変わるわけではなかったが。

「1」の数字が点灯する。ドアが開く。その前に男が立っていることを恐れた。誰もいなかった。

エレベーターの箱から一気に飛び出した。マンションの建物から出たところで、背後を振り返った。そうすべきではなかった。男が非常階段から外へ飛び出してく

るところだった。サングラスが男の表情を隠していたが、その敏捷な動きは尋常ではなかった。振り返ったことで、私と男の距離は急激に縮まった。

道路に向かつて駆け出した。脚がもつれかかった。手に持った鞆が邪魔だった。が、投げ捨てるわけにもいかない。

男は声を発しなかった。

何の前触れもなく、背後から腕が私の首に巻き付いた。それ自体が一つの生き物でもあるかのように。うめく余裕すら与えられなかった。背後に激しい力で引きずられた。男の腕が喉に食い込んだ。助けを求めようにも、声が出せなかった。なすすべもなく後ろに引つ張られていく。

私は再びエレベーターホールに引き込まれた。必死に鞆を背後の男にぶつけた。腕を振り回した。脚をばたつかせ、男を蹴った。しかし、いかほどのダメージも与えられなかった。

男の腕が締まっていく。脳に流れる血管が圧迫される。顔面から血の気が引いていくのがわかった。男は腕の力をますます強くした。ぎりぎりとの首の骨がきしんだ。気管がつぶれていく。いくらあえいでも、空気は入ってこなかった。耳鳴りまでし始めた。

視界も、映りの悪いテレビのようにちらついていった。確かに眼を開けているはずなのに、徐々に像が不鮮明になっていった。ぼんやりと見えた視界のなかで、道行く人はいなかった。マンションも静まり返っている。まだ太陽は沈んではおらず、曇ってはいても外は充分に明るいはずだ。

そんななかで、私は殺されかけている。

エレベーターの向かいの壁に見えた四角い物体のようなものは、非常ベルに違いなかった。

私は男の脚を蹴飛ばした。無駄とは知りつつも、鞆で後ろの男の胴体を殴りつけた。

必死に、壁のほうへ体を伸ばす。男はますます腕に力を込めた。もはや呼吸はできなかった。壁の非常ベルの箱の像がぼけていく。手を伸ばした——つもりだった。非常ベルはどんどん遠ざかっていく。右手に持った鞆を振り回す。届かなかった。もはや非常ベルはおろか、エレベーターホールそのものが視界から——私の意識か

ら遠ざかっていくようだった。見えない非常ベルに向かって、もう一度鞆を振り回す。手応えはなかった。いや、あつたのかもしれないが、何も感じなかった。手だけではない。全身の感覚が失われていた。

はじめて死を意識した。

死は、明確に実体感のある、手で触れられそうなものとして、私のすぐ目の前に——いや、すぐ背後にあった。

がくん、と膝が折れるのを感じた。体が沈む。しかし首に巻き付いた腕は緩まなかった。

そのとき、色彩を失った視界のなかを何かがよぎった。

茶色い塊——野犬のような生き物が飛び込んできたようにも見えた。

それ以上、何も考えられなかった。

わかつたのは、男の腕の力が緩んだということだけだった。

私はそのままうつ伏せに倒れ込んだ。顎が床に激突した。激痛と火花。が、感じたのはそこまでだった。私の感覚器官はそこで活動を停止した。

生まれてはじめて、気を失った。

眼を覚ますと、そこはやはりエレベーターホールだった。

気を失っていたのは長い時間ではないらしかつた。ほんの数分だけだったのかも知れない。

静かだった。聞こえるのは、規則正しい私の呼吸の音だけだった。

そう、私は呼吸している。

呼吸が安定しているというのはずなわち、私は死ななかつたということだ。体のダメージもさほど大きくないということだ。

そういう自分の判断に力づけられた。両手をそろそろと動かして床についた。

そのとき、もしかしたら男が私をじっと見ているのではないか、という想像にとらわれた。自分の獲物の苦しむ様子を、男は冷ややかに楽しみながら見下ろしているのではないか。

見える範囲内に、人の姿はなかった。耳をすます。やはり、私の息づかいしか聞こえなかつた。起き上がり始めた。

肩から首にかけての筋肉が激しく痛んだ。がくがくと痙攣する。冷や汗がにじんだ。口の端から垂れたのは、血の混じった唾液だった。

それでもなんとか立ち上がることができた。

エレベーターホールは無人だった。男の姿はない。入り口から見える外の道路には、薄暗い闇が降りつつあるようだった。

鞆を拾い、よろよろと外に出た。

額に冷たいものがかかった。雨だった。いつ頃から降り出したのだろう。冷たい雨だった。

雨のなか、歩き出した。少し行ったところで、マンションを見上げた。五階の男の部屋に明かりはなかった。マンション全体でも、明かりのついた部屋は少なかった。

男はどこへ行ったのか。なぜ、私をエレベーターホールに置き去りにしたのか。

野犬――

ほんとうに、あるとき何かがエレベーターホールに飛び込んできたのだろうか。死にかけて私が薄れゆく意識のなかで見た幻覚ではなかったのか。

呼吸をするたびに、唾を飲み込むたびに喉が痛んだ。

私はふらつきながら、半地下の駐車場へ回った。

赤いカルマン・ギアが眼に入ったとき、私は体が一気に凍り付くような感覚におそわれた。男は、この近くににいるのだ。マンションから立ち去ったわけではない。

野犬。それはぼんやりとした視界のなかで、茶色い敏捷な塊に見えた。もしもそれが、人間であつたら――

私は、駐車場から出て、小走りに雨のなかを公園に向かった。すぐに全身びつしよりと濡れそぼってしまった。雨の冷たさが皮膚に染み込む。喉の痛みのためと、体が冷えたためか、すぐに息切れがして苦しくなった。それでも私は雨を浴びつつ走った――公園へ向かって。

雨に打たれた三つの土管は、そのけばけばしさを減じて、灰色の空ときほどの違和感なく調和して鎮座していた。

城戸はいなかった。

突如として、体中がしびれるような疲労感が私の全身に襲いかかってきた。

土管の前から、マンションを振り返った。マンションに入る者も、出ていく者もいなかった。暗さを増していく空の下で、マンションはどこか不吉な存在に見えた。そこにはふつうの人々のふつうの日常があるはずなのに。

雨は降りやむ心配がない。

この雨の下のどこかに、城戸がいるのだ、と思った。

おまえはいつたいどこをさまよい歩いているのか。

そしてまた505号室の男も、この雨の街にいる。

私は、雨の滴を垂らしながら駅に向かって足早に歩き出した。背後から誰かがまた首を腕を巻き付けてくるような思いがどうしても去らなかつた。何度も後ろを振り返りながら、早足で進んだ。

誰も襲つては来なかつた。

金曜

私と城戸真澄は同じ大学に合格した。だが、入学してからは彼とだんだんと疎遠になっていった。ある雨の日の午後だった。大学の中央図書館で私はほぼ半年ぶりに城戸真澄と出会った。城戸は弓道部に入部したはずだったが、半年ぶりに会った私に向かつて、彼はあまりに素気ない口調で、とうに退部したことを告げた。入部早々に弓道部のホープとして期待を寄せられたと聞いていただけに、私には意外な話だった。理由を尋ねると、城戸は「弓道つて的当てゲームだったのか？俺はそんなことやるために入ったわけじゃねえのに」と呟くように答えた。それから独り言のように「ただ射ちゃいいってもんじゃないだろ。射つときには、いろいろ要るんだ。射つ理由とか覚悟とか度胸とか」とつけ加えた。城戸らしくない、ひどくさびしげな声だったのを覚えている。

城戸真澄はそんな男だった。

冷え切った心と体を、いつもなら安ウイスキーが温めてくるはずだった。しかしその夜は、いくらアルコールを流し込んでも、私は冷えたままだった。私の脳のことかが、かたくなに酔うことを拒否しているようだった。そんな状態で、日付が変わった。

雨はひたすら落ち続けていた。網戸の向こうから絶えず聞こえているその音が、ひどく不快でならなかった。冷たい雨ではない。むしろ蒸し暑いくらいだった。私はサッシのガラス窓を閉めた。外界と隔絶された自分だけの城を築くのだ。何も見ず、何も聞かず、何も感じずに、私は城のなかで眠ればいい。木曜という日を忘却し、新たな金曜という日を迎えればいい——いつものように。

誰がそれを非難できる？

それでも雨音は私の部屋のなかに忍び入ってきた。五感を鈍らせるためにウイスキーのグラスを重ねた。そのうちに、確かに聴覚は鈍くなっていった。しかしその代わりに、五感以外のべつの感覚が、逆に研ぎすまされていくようだった。

陰湿に入り込んでくる雨音が、私の心をじつとりと不快に湿らせた。にもかかわらず、心のべつの一部分はいまましいほどに乾き切っているのだった。

湿った部分が降り続く重たい雨を思わせ、乾いた部分が忘却を促す。そのせめぎあいのなかで、身勝手にも私の意識に眠りが降りていた。

夢を見た。内容は覚えていなかった。しかし悪夢だということだけは覚えていた。汗だくになって目覚めた。自分の心臓の音をしばし聞いていた。呼吸が震えているのがわかった。

窓を開けようと上半身だけ起き上がったときだった。鋭い電子音が静寂を引き裂いた。電話だった。時計を見る——四時五十五分。すかさず飛び起きた。

確信があった。

電話に手を伸ばした。ディスプレイの表示は「公衆電話」だった。

「もしもし」

半ば祈るような気持ちを抱きながら受話器に向かつて言った。ほんのわずかの間があった。電話の向こう側で、少し息を飲み込む気配があったことを聞き取った。

「やっぱり……やっぱり、城戸なんだろう？ 今、どこにいるんだ？ どこからかける？ 僕は昨日……」

わざわざ名乗る必要など、私と彼のあいだにはなかった。

「俺はもう消える。おまえには、世話になっちまったな」

私の言葉を遮って彼は言った。

「いや、城戸……」

「消える前に礼を言つとこうと思つてな。煙草、ありがとうよ」

「それより、訊きたいことがあるんだよ。話したいことも、話しておかきやいけないことも、たくさんあるんだ。電話じゃなくて、もう一度直接会えないか？ 今からだつて、僕は——」

「無理だ」

その声は、何かを断ち切るかのように響いた。

「あんたは勘違いしてる。俺は城戸なんて名前じゃねえ」

私は、絶望的なほど情けない気分にとらわれた。

「どうしても、僕を信用してくれないのか。確かに僕の態度はぶしつけで、思いやりがなかったかもしれない。身勝手に思い上がっていたかもしれない。だからと言って、そこまで自分を欺いてみせなきゃいけないのか？」

答えはなかった。しかし、受話器の向こうでは城戸がじつと私の言葉を反芻しているのがわかった。その背後から小さく音が聞こえてきた。その音はメロディを奏でていた。風に乗って流れてきているようだった。

「とうりやんせ」——メロディ式の信号のようだった。もの悲しい旋律が静寂を割つて途切れ途切れに聞こえてくる。そんななかに、私は確かに城戸真澄の呼吸を感じた。

「俺は、消えるよ」

城戸は、ほとんど聞き取れないくらいに静かな口調で言った。

「待ってくれ」

私は言った。その私の声もまた、自分のものとは思えないくらいにかすれ、まるで哀願するような響きを帯びていた。

城戸は待ってくれた。受話器は置かれなかった。私は言葉を探しつつ言った。

「昨日、僕を助けてくれただろう。ほんとうは、その礼を言わなきゃいけなかった。ありがとう。命を救われた」

城戸は何も言わなかった。

「あの男は誰だったんだ？ おまえが僕を助けに来てくれたのは、偶然じゃないんだろう？ いったい、今のおまえは、どういう世界に行ってしまったんだ？」

「やめろ！」

城戸の鋭い声が私の耳に突き刺さった。

「忘れる。おまえは誰にも会わなかった。何も見なかった。昨日までのことは全部忘れる」

「城戸！」

「……城戸はもう死んだ」

あまりにも感情のこもらない、冷やかな声だった。

「何だって！」

「おまえの知ってた城戸真澄って男は、もうこの世には生きちゃいねえ。何年も前にくたばりやがった。馬鹿な野郎だよ、あいつは。おまえも、死人の影を追いかけるのはやめるこつたな。むなしいだけだ」

「待てよ、城戸！」

今度こそ、電話は切れた。

私は空電音を発し続ける受話器を、ただ茫然と見続けていた。

何かがこみ上げてくるのがわかった。それは名状しがたい衝動のようなものだった。

私は、その衝動に身を任せた。立ち上がった。

つづく